

目黒寄生虫館月報

昭和34年5月10日発行・毎月1回10日発行

第3号

昭和34年5月

内 容

日本寄生虫学会総会開催	1
大山桂博士来館	1
安羅岡氏エジプトの貝を寄贈	1
鹿大神田氏イタチの鉤頭虫を寄贈	1
目黒区内小中学校へ寄生虫標本を寄贈	1
草島教授の翻訳進む	1
フクロウ科鳥類の <i>C. elongatus</i> について (鈴木俊邦)	2
海産魚の鉤頭虫(木原緑)	2
寄生虫館を訪れて(林青梧)	3
バラサイト「私は貝になりたくない」	3

日本寄生虫学会総会開催

第15回日本医学会総会は4月1日から5日まで開かれ、鉤虫症、回虫症、日本住血吸虫症、フィラリア症についてシンポジウムが行われたので、館員一同は手分けして聴講した。

また、第28回日本寄生虫学会総会も4月6、7日の両日東大において開催された。

学会を機会に多くの学者の来館をみることは、館員一同の楽しみとしているところであるが、特に本年は北大山下教授、大林助教授、北村助手、北海道衛研大

野善右衛門氏らが来館投宿され、学会多忙の寸暇をさいて直接研究面の指導をうけることができたのは望外の幸であった。

山下教授は寄生虫学会総会で「わが国における包虫症に関する研究」を特別講演され、同症の全貌を明らかにされたのは、きわめて有意義なことであった。なお、本館からは

1. 関東地方を中心とした野生鳥獣類の寄生虫検索(第2報)——亀谷、野々部、鈴木、町田

2. 鉤頭虫の研究(第3報) *Centrorhynchus elongatus* YAMAGUTI の辜丸の奇形について——木原の2題について発表した。

今後も、寄生虫関係諸先生の来館投宿されることを大いに歓迎してやまない。

大山桂博士来館

3月1日、貝類の権威・理博大山桂氏が来館され、中間宿主としての貝類についていろいろと教示された。

安羅岡氏、エジプトの貝を寄贈

WHOの講習に出席された安羅岡一男氏は、エジプトで入手された *Biomphalaria alexandrine* (*Schistosoma mansoni* の中間宿主)、*Bulinus truncatus* (*S. haematobium* の中間宿主) の2種類の貝を、4月11日寄贈された。これで本館に保存される住血吸虫の中間宿主は *Oncomelania nosophora* (日本、中国)、*O. hupensis* (中国)、*O. quadrasi* (フィリピン)、*Katayama formosana* (台湾) と合わせて6種類になった。

鹿大・神田氏イタチの鉤頭虫を寄贈

3月17日、鹿児島大医学部・神田弥栄氏からイタチに寄生する *Gordiorhynchus itatsinis* の標本が寄贈された。

目黒区内小中学校へ

寄生虫標本を寄贈

寄生虫標本を寄贈する計画は、合成樹脂封入という技術上の困難のために延引していたが、ようやく完成したので、3月17日、34組を区教育長の手もとに届けることができた。今回は、回虫、鉤虫、蛭虫の封入標本を、美しい箱に収めたもので、学校教育に十分活用されることを期待している。引き続き衛生昆虫などを寄贈する予定である。

草島教授の翻訳進む

出版準備中の「日本における寄生虫学の研究」は原稿が集まりつつあるので、教育大草島教授により逐次翻訳に着手しているが、このほど一部完成をみた。同氏はユネスコ出版「Japan」の名訳でも知られているように、わが国における有力な翻訳者であり、同時に本館の事業に対しても協力されてきている。

XXXXXXXXXXXXXXXX

	解剖数	鉤頭虫保有 (率)	線虫保有 (率)	条虫保有 (率)	吸虫保有 (率)
フクロウ <i>Strix uralensis hondoensis</i>	10	9 (90%)	1 (10%)	0	0
オオコノハヅク <i>Otus asio semitorques</i>	10	7 (70%)	2 (20%)	3 (30%)	0
トラフヅク <i>Asio otus otus</i>	2	0	0	0	0
コミミヅク <i>Asio flammeus flammeus</i>	3	0	0	0	0
アオバヅク <i>Ninox scutulata japonica</i>	1	0	0	0	0
計	26	16 (61.5%)	3 (11.5%)	3 (11.5%)	0

フクロウ科鳥類の *Centrorhynchus elongatus* について

研究員 鈴木俊邦

当館では、開館以来今日までに56体のフクロウ科鳥類を解剖に附した。その中で32年10月までの26体については整理が終ったので、野鳥全般の寄生虫報告の際に、亀谷、野々部、鈴木、町田の共同報告として2回にわたり発表した。その後の30体については目下整理中であるから後日発表することになる。

上の表で目立つことは、鉤頭虫が圧倒的に多いことである。しかも全部が *Centrorhynchus elongatus* YAMAGUTI となっている。そしてフクロウ、オオコノハヅクの両種に限られており、他のフクロウ科鳥類には殆ど寄生していないことも特長である。このことはその後の調査にも現われているのである。

海産魚の鉤頭虫

研究員 木原 緑

33年4月～34年3月の1年間に、一般家庭の食卓に上るタラ、カツオ、サンマ、ブリ、シマアジ、ホンサバ、ヒラメ、アナゴなどの海産魚類371尾を解剖し、内部寄生虫を採集した。数からみると、線虫、吸虫、条虫の順になり、鉤頭虫は比較的少くして58尾(15%)に寄生をみた。特に、鉤頭虫寄生の多い魚は、タラ、カツオ、サンマで、タラ1尾から、4～7cmの *Echinorhynchus gadi* ZOEGA 61を採集したことがあった。カツオには、しばしば *Rhadinorhynchus katsuwonis* HARADA が寄生している。これはタラ

の *Echinorhynchus gadi* に較べると、一般に虫体も小さく、寄生数も現在のところ最高11に止まっている。サンマは、よく内臓を出さずに焼くことが多いので、鉤頭虫をご存知の方もいると思う。余談になるが、私自身はじめてサンマの鉤頭虫にお目にかかったのは、大学の卒論の材料を探していた折に、夕食のお皿にのせられた、まっくら焼きのサンマからであった。当時はこれほどやすく採集できるものと思はなかったので、その焼けたサンマから出てきた鉤頭虫を丁寧に水洗し、プレパラートをつくったものである。もちろんこの鉤頭虫、死んではいたが焼けていなかったため、*Rhadinorhynchus selkirkii* VAN CLEAEE と同定された。一般に、鉤頭虫は美しい赤橙色をしているので判りやすいし、注意しているとかなりしばしばみられるものである。なお、文献によれば、魚の鉤頭虫が人間に寄生することは、まずないらしい。

まだ実験数も少ないが、これまで採集されたものについては後日詳しい報告をする予定である。

(旧姓・小林)

生物学同好会

3月14日下目黒小学校で、予研・鈴木了司先生が、「鉤虫の話」を講義され、鉤虫の疫学について氏独特の新しい見解を明らかにされた。

5月には福井玉夫先生のご指導により、逗子海岸で採集会を行う予定。(野々部)

鶴田事務長就任

佐野事務長退職のあとをうけて3月1日鶴田征四郎氏が事務長に就任した。

寄生虫館を訪れて

林 青 梧

不動公園山内の一角に、目黒寄生虫館という白聖の建物ができしたのは、すでに、数年前のことだった。もっとも、いまの館と、最初のころのとは、幾分違うようである。世界各国から人間、動物等の生体に寄生する生物の標本を集め、予防法を明示するというのである。日本のように、変則的な文化国家では、一方で殺人的な都市の発展をみるかと思うと、他方では、原因も治療法も分らない奇病が、依然としてあとを絶たない、という現象を呈するのである。ともすれば、国政を司る人間共は、前者ばかりをあげつらい、後者に関しては、全くの無智といっても差支えないくらいであった。ほんとうに文化の発展に役立つ仕事については官僚は、全然アテにするわけにはゆかない。これが悲しい日本の現状なのである。

その意味で、寄生虫館に一步足をふみ入れたとき、わたしの胸にさいしょにきたのは、むなしさなのである。いちめん、それは、民間人の館長に対する敬意ともいえた。そのくらい、寄生虫館の内容は、素人のわたしにも、見事に思えたのである。総点数四千を越えるという標本の量に、圧倒された。ひと口に四千とはいえても、それだけの標本を蒐集するのは容易ではない筈だ。また、標本類の中にはさまれて「小鍛冶」の木彫作品があり、五十号の油絵が壁にかかっている。彫刻作品の展示といい、油絵の陳列といい、標本を蒐集して無料で一般に展示するという動機とは、別の個所から出た行為でないとうけとれる。これは、館長の心の幅の広さを物語るのであろうか。わたしは、標本をひとつおみせてもらって、集約的に、そんな印象を受けたのである。

陳列品のひとつひとつに、形式的、画一的ともいべき官僚的な匂いは微塵もなかった。観覧者に親切にかんでふくめるように説明がほどこしてある。因みに国立病院でもどこでもよい。官の経営する施設に行ってみればわかるけれど、あのぶっきらぼうな、そっけない雰囲気は、探し出すことすら出来ないのである。

やはり、こういった業績は、民間人の手で、まもられつみ重ねられてゆくべきものかも知れない。館長から訪問記を求められて、わたしは嬉しかった。寄生虫館の存続と発展に対して、拍手と賛成の詞をおくりたかったのである。(作家)

短 信

3月7日——国立科学博物館で開かれた貝類学会談話会に出席、板垣博氏の「カワニナの解剖学的研究」を聴講。(木原)

3月9日——小田原水産生物研究所小田原博士来館

3月13日——東京医歯大獣医学教室・加納二郎博士を訪ね、バラサイト「ハエとその越冬」のパネルについてお話をうかがい、センチクバエの蛹をいただく。(鈴木)

3月17日——日本教育新聞記者来館。

3月19日——毎日新聞記者来館。

4月11日——予研寄生虫部を訪問、貝の同定をお願いする。(木原)

月例展示・バラサイト第2回

5・6月『私は貝になりたくない』

もう一度生まれてくることができれば、私は誰も知らない深い海の貝になりたい——これは、「私は貝になりたい」の主人公が、絞首台の露と消えるときに叫ぶ台詞です。深い海の底の貝ならともかく、淡水産巻貝などには、寄生虫特に吸虫類の中間宿主として注意しなければならぬものがあります。これらの巻貝をいろいろと集めて(下に記す)、寄生虫との関係を展示してみました。

Oncomelania nosophora, *O. hupensis*, *O. quadrasi*, *Katayama formosana*, *Biomphalaria alexandrine*, *Bulinus truncatus*, *Segmentina nitidella*, *Lymnaea ollula*, *L. truncatula*, *Bulinus striatulus*, *Bithynia* sp., *Bradybaena similaris*, *Semisulcospira lipertina*, *Pomatiopsis eapidaria*, *Assimineia parasitologica*, etc. (町田)